校長室だより～燦燦～ №６５７

隠れたカリキュラム

2022.11.21

今年度も、次年度の教育課程編成に向けて動き出した。教育課程をカリキュラムと言ったりする。昔、勉強していたら、カリキュラムには２つのものがあり、一つは正規のカリキュラムで、もう一つが「隠れたカリキュラム」、ヒドゥン（hidden）カリキュラムだということを知った。ヒドゥンとは、隠れている、隠されているという意味である。

そのときは、隠れたカリキュラムという言葉が妙に気になった。だが、そういうことかと表面的に理解し、わかったようなわからないような状態で終わった。その後も、教育関係の資料等を読んでいると、その言葉が出てくることがあった。

昨年あたりから、この隠れたカリキュラムについて考えるようになってきた。隠れたカリキュラムとは、学校のフォーマルな正規のカリキュラムの中にはない知識、行動の様式や性向、意識やメンタリティが、意図しないままに教師や仲間の生徒たちから教えられていくといったものをいう。

有名進学校のエリート意識の固まりのような生徒、ある特定の学校の校風に染まった生徒など、学校という制度を通しての社会化の特殊なものをいう場合に社会学、教育社会学の分野でよく用いられる用語である。潜在的カリキュラムともいう。

また、男子、女子といったジェンダーないし性による社会的な役割演技や役割意識も、多くはこうした学校の隠れたカリキュラムの中で培われることが多いといわれる。例えば、今ではなくなったが、委員会やクラブの長は男子、副は女子といったようなものである。

教育する側が意図する、しないに関わらず、学び取られてしまう。それが、隠れたカリキュラムである。よく考えると、おそろしい話である。どの学校でも、正規のカリキュラムには大きな違いはないだろう。実は、隠れたカリキュラムがその学校の成否を握っているように思える。

文部科学省の資料を見ると、人権感覚の育成を目指す取組のところに、「隠れたカリキュラム」という言葉が出てくる。そこには、隠れたカリキュラムとは、教育する側が意図する、しないに関わらず、学校生活を営む中で、児童生徒自らが学びとっていく全ての事柄とある。その例として、以下の記述がある。

> 「いじめ」を許さない態度を身に付けるためには、「いじめはよくない」という知的理解だけでは不十分である。実際に、「いじめ」を許さない雰囲気が浸透する学校・学級で生活することを通じて、児童生徒ははじめて「いじめ」を許さない人権感覚を身に付けることができるのである。だからこそ、教職員一体となっての組織づくり、場の雰囲気づくりが重要である。

正規のカリキュラムを確実にこなしていくことは、もちろん大切だが、もっと大事なのは隠れたカリキュラムのほうである。時代の移り変わりとともに、その重要性は高まってきているように思う。一体となった組織づくり、場の雰囲気づくりのために、どんなことができるか、教育課程編成とともに考えていきたい。